

10 如来蔵・仏性思想について

【全2回】／開催方法：現地

しもだまさひろ
下田正弘

東京大学大学院
人文社会系研究科教授
日本印度学仏教学会理事長



受講料 会員料金：¥5,000 早割価格：¥4,000（納入期限：7月28日）

【日程・時間】【全2回】8月4日（木）13：30～15：00・15：20～16：50

■受講に必要なもの

〔テキスト〕レジュメ配布

苦悩の現実の底に沈みこみ、出口をどこにも見いだせない凡夫が、あまねく仏になりゆく存在であることを仏の視座から照らし出した思想、それが如来蔵思想であり、仏性思想である。如来蔵、その同義とみなされる仏性という概念は、遅くとも紀元後4世紀ごろ『大般涅槃経』において登場した。その後、『如来蔵経』『勝鬘経』『央掘摩羅経』など、いくつかの大乗経典によって発展的に継承されたこれらの概念は、真如、三宝、菩提、仏身など、仏教思想上の重要な主題を巻き込みながら、仏教における救済論というべき体系的思想として、6世紀ごろ『宝性論』において完成する。

如来蔵思想は、インドを超えて東アジアとチベットの仏教にも大きな影響を与え、それぞれに独自の思想をかたちづかった。東アジアにおいては、一方では『涅槃経』を中心に思想が受容され、他方では唯識関係の論書と結びつきながら『大乘起信論』において思想が完成された。6世紀に中国で成立した可能性の高い、わずか一巻からなる小片のテキスト『起信論』は、如来蔵をアーラヤ識と真如とに存在論的に重ねあわせ、真如が無明の薫習を受けつつ輪廻と涅槃がともに現成するという、インドでは確認されない独自の思想を完成した。他方、チベットにおいては、如来蔵思想が現れる11世紀以降、『宝性論』を中心に多様な如来蔵思想の議論が深化する。

こうした如来蔵思想には、一つの課題が残されたままになっている。それは、すべての衆生に仏の本性が存在することを説き、その本性をアートマン（真我）と表現する如来蔵思想は、正統的な仏教の無我思想や法の無自性を前提とする空思想とは相いれず、端的にいえばヒンドゥー思想そのものではないかという批判である。この批判にどのようにこたえられるかは、仏教の実践的な倫理における、重要な課題である。

本講義では、大乘仏教思想のもっとも発展した段階を示す如来蔵、仏性思想の意義について、研究の方法の問題、宗教一般における救済に関わる世界観に対する認識の問題、仏典における言説の様相の差異と思想との関係という、三つの観点から概観する。そのうえで、平等と差別という重要な問題が、仏教思想においてどのように解決されるかを探りたい。

【参考書】

- ①『仏教とエクリチュール』 著者：下田正弘 出版社：東京大学出版会 出版年：2020